

家庭と学校をつなぐ「くらし」の授業

伊東久美子 小田達夫 角田真紀子 木村有里 齋藤大地 清水麻由 野原隆弘 橋都由美子
澤隆史（東京学芸大学）

I はじめに

1. 中学部の「くらし」の授業

本校の中学部には、「家庭生活に必要な調理、被服、住まいなどに関する基本的な知識と技能を身につけるとともに、地域で生活するために基本的な知識（健康・安全・性、金銭など）を知り、進んで家庭や地域での生活に参加できるようになる」ことを目的として「くらし」の授業が設定されている。「くらし」の授業の大きな特徴は、知識・技能を獲得するとともに、“生徒が主体的に生活に参加すること”を重視している点である。つまり、生徒の生活の場としての家庭と学校が連携し合い、生徒が主体者として自らの生活を創っていくための学びを保障することが重要となる。

近年、OECDのDeSeCo（Definition and Selection of Competencies）プロジェクトが定義、選択したキー・コンピテンシーなどの様々な「新しい能力」が提唱され、注目を集めている。こうした能力観の下では、単なる知識や技能の獲得だけではなく、具体的な文脈の中でその自律的な活用が重視されることが多い。こうした流れを受け、文部科学省も「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問（2014）において、『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、『どのように学ぶか』という、学びの質や深まりを重視することが必要」とされ、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習や、そのための指導の方法等を充実させていく」ことを示した。

つまり、本校中学部の「くらし」の授業が目指すものと、現在の社会において求められるものは重なる部分が多く、生徒一人一人が『どのように学ぶか』という観点から彼らの学びを捉え直すことによって、中学部段階における「主体的・協働的な学びを育む支援」を明らかにすることができると考えた。

2. 主体的・協働的な学びとタブレット端末

中学部という年齢段階は、身体的特徴の変化とそれに伴う心理的動揺に代表される思春期を迎えること、そして、家族や教員などの大人との縦の関係から友達との横の関係が広がり、集団性が高まることを特徴として挙げることができる。

また、中学部の生徒は他者との比較から自己を捉える傾向が強まり、客観的に自己を見つめることが可能となる。そのため、生徒によって個人差はあるものの自己理解と他者理解の相互の深まりが見られる時期でもある。しかし、ともすれば友達と自分を比べて“できない自分”を過剰に意識し、心理的動揺を来しやすい時期でもあるため、健全な自己肯定感を育むことが自己への

関心や理解、そして他者への関心や理解を促す上で非常に重要である。

そこで、まずは一人一人の健全な自己肯定感を育むために“ある課題に対し未学習な状態の自分と学習後に出来るようになった自分を比べ、振り返る活動”を設定することとした(図1)。次に、“正解の定まっていない課題に対し友達同士が意見を出し合い友達同士で考え合うような学習活動”を設定することにより、それまで以上に自分自身を理解し、またお互いを理解することが出来ると考え、「他者と共に学ぶ」活動を取り入れることとした(図2)。

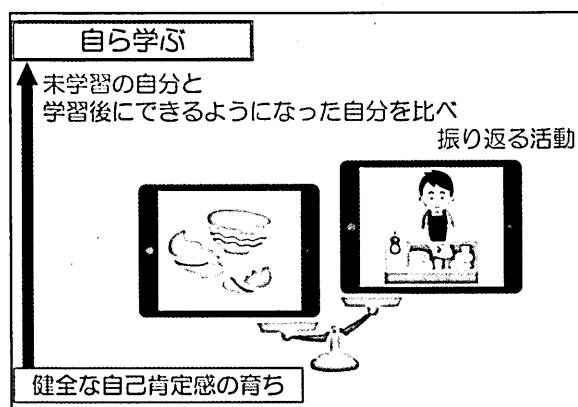


図1 主体的学びに関連する活動



図2 協働的な学びに関連する活動

知的障害のある子どもは、過去の出来事を想起したり、自分と他者の考えを比較したりするといった、今ここにはない事柄や目に見えない事象を扱うことが難しい場合が多い。そのため、“可視化”が彼らの主体的・協働的な学びを成立させるためのキーポイントであり、近年発展の著しいタブレット端末がこれに寄与することができる。つまり、タブレット端末の録画再生機能を用いれば、自分の過去の姿と最近の姿を動画で実際に見比べることができたり、自分と他者の考えの根拠となるような画像や動画を共有することができたりするのである。本校の実践において、以上のようなタブレット端末の利用の有効性は過去に実証されており(本校紀要,2014)、今年度は中学部においてもタブレット端末を授業に活用することとした。

3. 今年度の研究の目的

中学部段階で大切にしたい学びとして、自ら主体的に学ぶことに加え、他者と共に学ぶことを設定した。生徒がこうした学びを積み重ねることにより、健全な自己肯定感が育まれ、自己理解、他者理解が深まりを見せるという仮説の下、授業実践を行った。対象とした授業は「くらし」の授業であり、こうした仮説は、「主体的・協働的な学び」という観点から、生徒一人一人が「どのように学ぶか」について検討することで実証されると考えた。そこで、「くらし」の授業実践を通し、主体的・協働的に学ぶ力を育むための指導や支援について検討することを目的とした。

Ⅱ 授業実践報告

1. 従来と今年度の「くらし」の授業の違い

「くらし」の授業では、生徒の生活の場としての家庭と学校が連携し学習を進めていくことが重要となることは先述した。そのため、「くらし」の授業では、授業で取り組んだ内容を家庭でも実践しお手伝い等に繋げていくことができるよう毎時間ワークシートを作成し、それらをファイルに綴じ家庭に持ち帰るようにしていた。

しかし、生徒一人一人の生活技能の習得や知識の獲得の程度、及び家庭における家事の実施状況について個々に異なっていたため、授業では共通の題材を扱うも個に応じた支援が中心であり、集団としての学びの機会を十分に保障できているとはいいがたい状況があった。

そこで、今年度は、学校の授業の前に家庭において生徒が「くらし」の学習内容の予習ができるように、デジタル教科書が入ったタブレット端末を各生徒が家庭に持ち帰るという取り組みを実施することとした（図3）。

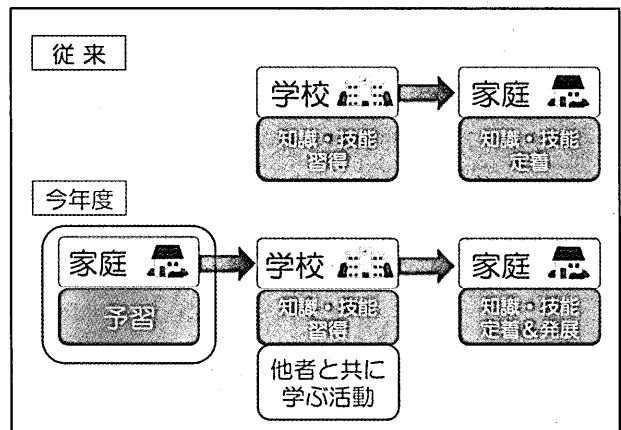


図3「くらし」の授業における家庭と学校の連携

2. 授業実践

1) 対象

本実践で対象とした生徒は中学部2年生の7名である。言語による指示で課題に取り組むことができる生徒から、具体的な見本の提示や身体援助による支援が有効な生徒まで幅広い実態の生徒が在籍する。中学部入学当初に実施した調理・被服・住まいに関する実態調査アンケートの結果（図4）を見てみると、生活技能においても個人差の大きい集団であった。

		生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E	生徒F	生徒G
調理	包丁	1	1	0	1	1	1	1
	味噌汁	0	0	0	1	0	1	1
	調理	0	0	0	1	0	1	0
	食器洗い	1	1	1	1	1	1	1
	食器拭き	1	0	1	1	1	1	1
被服	裁縫	1	0	1	1	1	1	1
	アイロン	1	1	0	1	0	0	0
	上履き洗い	1	0	2	1	2	1	1
	洗濯物干し	1	0	1	1	0	1	0
	洗濯物たたみ	1	1	1	1	1	2	1
住まい	拭き掃除	1	0	1	1	2	1	1
	掃除機	1	1	1	1	1	1	1
	風呂掃除	1	0	1	1	2	0	0
総合得点		11	5	10	13	12	12	9

* 2（一人で行える） 1（やったことがある） 0（経験がない）

図4 中学部入学当初の実態調査アンケート結果

2) 学習サイクル及びデジタル教科書

学校の授業において「他者と共に学ぶ」活動を設定するために、デジタル教科書を用いた学習サイクルを図5のように設定した。以下に詳細を示す。

- ・生徒は週末に一人一台、デジタル教科書が入ったタブレット端末を家庭に持ち帰り、家で課題（アイロンがけや台拭きなど）を実施してくる。
- ・家庭での取り組みの様子を保護者等に録画してきてもらい、その動画を翌週の「くらし」の授業で、学級全員と共有する。
- ・学校の授業では、家で予習してきた内容について扱い、その取り組みの様子については教員が録画し、その日のうちに家庭に持ち帰り、家庭において保護者と学校での取り組みの様子を共有することとした。

また、デジタル教科書は図6のような構成とし、生徒個人の実態に応じて、手順の数や内容、画面上の文字の有無などを変更した。

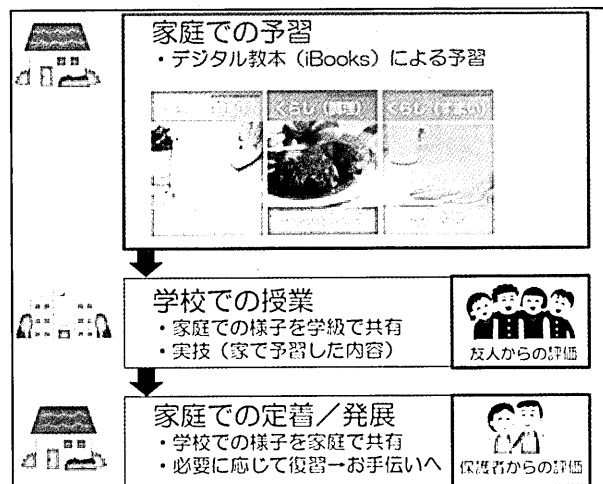


図5 学習サイクル

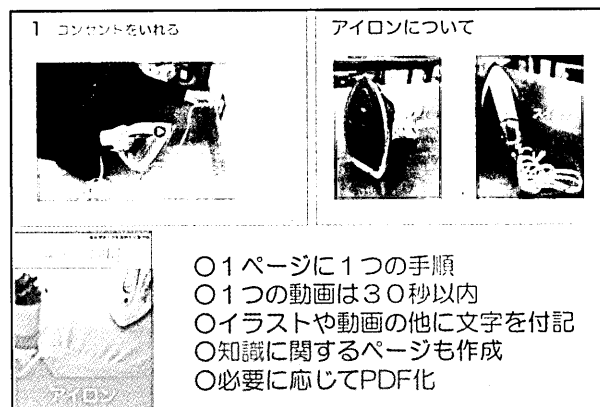


図6 デジタル教科書の構成

3) 指導経過

授業の予習をすることの効果が見られ始め、家庭である程度の知識や技能を獲得してきた生徒達は、これまで以上に積極的に授業に参加するようになった。また、家庭で洗濯等を実施する時のうまくできない自分の姿と、学校の授業で何回か繰り返し練習しうまくできるようになった自分の姿とを見比べることによって、生徒自身が「できるようになった」と実感しそれを次への学習の動機や、自信に繋げていく様子がみられた。

こうして、家庭で予習をすることで、生徒一人一人の「自ら学ぶ」姿を引き出すことができ、「他者と学ぶ活動」に向かう素地が整った。

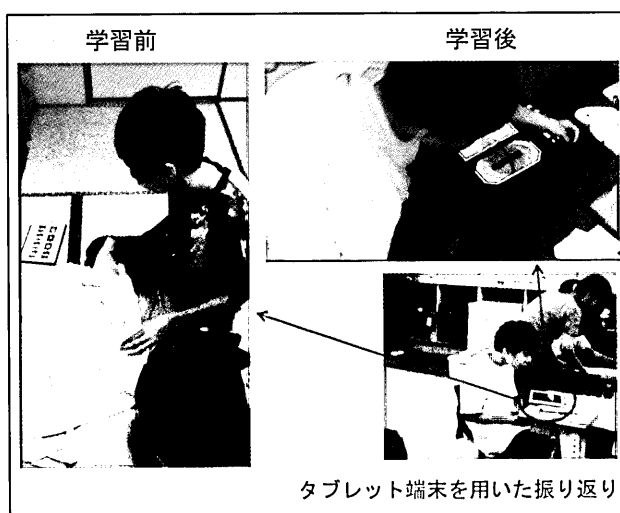


図7 授業内の振り返り場面

そこで「他者と学ぶ活動」として、授業では二種類の活動を設定した。1つが、自分とは異なる考えを持った人との対話を通じて学習する「多様な他者との協働で学ぶタイプ」の活動、もう1つが、個人で解決できないことを身近な他者の助けを借りて学習をする「個人作業を協働で行うタイプ」の活動である。



図8 多様な他者との協働で学ぶタイプ



図9 個人作業を協働で行うタイプ

「くらし」の授業の大まかな年間指導計画は図10の通りである。デジタル教科書を活用した「くらし」の授業は9月以降から本格的に実施した。そのため、第1期の「被服」ではデジタル教科書を活用した授業は1回のみの実施であったが、第2期以降は毎回の授業でデジタル教科書を活用した。以下では、指導の経過を3期に分け記載する。




第1期 4月～9月	第2期 9月～12月	第3期 1月～3月
被服 	調理 	住まい 

図10 「くらし」の授業の年間指導計画

(1) 第1期（9月）「洋服のたたみ方・しまい方」

事前に7名の生徒に同一のデジタル教科書が入ったタブレット端末を配布し、予習をするよう求めた。授業では、一人ずつ家庭での取り組みの様子を共有したが、生徒は動画に興味を示すものの、背景に映っている本棚やテレビ等にばかり注目し、教師側が意図したような生徒間の対話はほとんどみられなかった。さらに、授業の後半に「個人作業を協働で行うタイプ」の活動として設定した、グループで協力して大量の洗濯

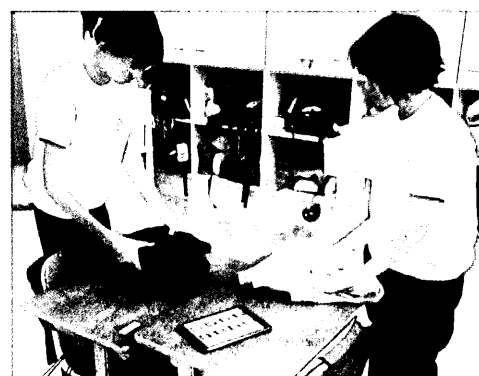


図11 タンスに収納する場面

物をダンスに収納するという活動では、一人一人が目の前の課題に真剣に取り組むものの、グループ間で相談や教え合いのような姿は先程同様、ほとんどみられなかった。つまり、協働的な学びがほとんど成立しなかったのである。その理由として、「洋服のたたみ方・しまい方」の授業では、全員に共通のデジタル教科書を渡したため、自分と他者との違いが明確にならず生徒同士が話し始めるきっかけが弱かったと考えられた。また、洗濯物をダンスに収納するという活動は生徒同士が協力したりする必然性が弱く、生徒たちの活動への動機づけも低かったのだろう。

そこで、まずは活動への動機づけを高めること、そして自分と他者との違いをより際立たせることを、第2期へ改善のポイントとした。

(2) 第2期（9月～12月）「お楽しみパーティーをしよう」

第2期の調理では、まずは基本的な調理に関する知識や技能を習得するために、「たらこスパゲティ」「きつねうどん」「もやしラーメン」「焼きそば」を題材とした教師主導の授業（全4回）を行った。その後、「お楽しみパーティーをしよう」という題材を設定し、前時までの授業で獲得した調理の知識や技能を活用して、生徒たちの食べたいものを自由に作るという授業を設計した。

“生徒たちが食べたいものを選ぶ”という活動を設定したことにより、生徒たちの意欲が高まり、ケーキ、餃子、ハンバーグを作る3グループが構成された。第1期の改善点を踏まえ、共通のレシピではなく、敢えて異なる手順や材料のレシピで予習してくることを指示した結果、授業では生徒たちの間に今までには見られなかったような新たな学びが生まれた。

材料が違うことで同じハンバーグでも味が違うということに気付いた生徒たちは、自ら「どれが一番美味しいのか。」という疑問を持ち、試食会が行われた。また、別のグループでは、餃子の作り方が2人の間で全く異なっていたことで、相手のやり方に関心を持ちそのやり方で試しに餃子を作ってみることで、自分と相手どちらのやり方が自分には作りやすかったのかを考えるきっかけとなった。

以上のことから、生徒間に存在する様々な差異が学びの資源になることが確認された。さらに、自分と他者の方法を比較し、最終的に自分にとってどのような方法が良いのか考えるといった姿も見られ、生徒の学びの深まりが観察された。そこで、第3期では、他者との違いを資源として生徒自身が自分なりの意味や理由を創り直す過程を重視した実践を行うこととした。



図12 食べたいものを考えている場面



図13 ハンバーグの試食会

(3) 第3期（1月～3月）「自分の部屋をきれいにしよう」

第3期では、第2期までの改善点を踏まえ、授業の前半に「多様な他者との協働で学ぶタイプの活動」として家庭での取り組みを生徒間で共有する活動を、授業の後半には「個人作業を協働で行うタイプの活動」として課題解決型の活動を毎時間設定した（表1）。

第1回目の授業では、生徒一人一人が実際の自分の部屋を紹介することで、「自分の部屋をきれいにするために様々な掃除の仕方を学ぶ」という題材を貫く大きな目標を自分事として捉えることができた。

また、各授業の後半に設定した、和室や洋室など1つの部屋を2～3人のグループで協力して掃除をするという「居室の掃除」（図14）では、回を重ねる毎に主体的・協働的な学びに関わる生徒たちの様々な姿が見られた。それらは具体的には以下の様な姿であった。

表1 くらし「住まい」指導計画

回数	学習内容（前半／後半）	
1	自分の部屋の紹介	居室の掃除
2	自分に合った整理整頓のやり方	居室の掃除
3	自分に合った床掃除のやり方	居室の掃除
4	自分に合った窓ふきのやり方	
5	自分の部屋の掃除の紹介	まとめ



図14 居室を協力して掃除する姿

①生徒同士が考え、相談する姿

（ドアの棧の砂はどのようにすれば、掃除機で吸い取ることが出来るのかどうかを相談する姿）

②自分とは違う他者のやり方を取り入れる姿

（物を移動してから掃除機をかける友だちの様子を見て自分もやってみようという姿）

③他者がやっているから自分もやってみようという姿

（苦手な掃除機でも友だちがやっているから自分もやろうという姿）

④活動を動画で振り返り、互いの取り組みを認め合う姿

（タブレット端末を活用し、活動を振り返り、次時への動機を高める姿）

4月当初、生徒たちは自分と他者との違いに興味はあるものの、“違っていること”が良いことであるとの認識が弱かった。その後、数か月の間、タブレット端末を活用し各家庭の様子を生徒間で共有したことにより、生徒たちは自分と他者は様々な違う存在であるという事、その“違い”は否定するものではなく受け入れ認めることが大切である事、さらに“違う”ことが自分の学びをより深める可能性のあることに気付き始めた。つまり、生徒たち自身が他者と学ぶ事の意味を実際の経験を通して理解することができたため、先にあげたような生徒の姿が授業内で見られたのだと考える。

Ⅲ まとめと今後の課題

1. 中学部における主体的・協働的な学び

今年度は、タブレット端末を活用した「くらし」の授業実践を通し、生徒達の主体的・協働的な学びを育む支援について検討した。約1年間の実践の中で確実に生徒たちの学びの質は変化し、その変化は日常生活における彼らの意識や態度にまで及んだ。生徒は他者との間に存在する様々な違いを学びの資源とすることで、他者に対する理解を深め、他者を通して見る自己に対する理解についても同時に深めていくことができた。その過程で生徒たちは学級内に存在する多様性を自然と受け入れることができるようになり、「くらし」の授業外の場面でもお互いに認め合い肯定的な言葉を交わし合う姿が多く見られるようになった。

2. 今後に向けて

「主体的・協働的な学び」という観点から、生徒一人一人が『どのように学ぶか』について検討を重ねるにつれ、教師の役割について考え直さなければならなかった。つまり、これまでは教師は「教える」、生徒は「学ぶ」という固定的な役割が与えられていたが、生徒たちの主体的・協働的な学びを展開していく上では、教師は「教える」という役割に留まっていることはできなかった。授業実践を重ねるにつれ、主体的・協働的な学びを育むために教師は、生徒同士で作り出してほしい知識を先に教える事、「対話の型」を優先する事、授業の「進行効率」を優先する事はするべきではないということが明らかとなった。

今後は、こうした教師の役割をさらに追及するとともに、生徒が学習で得た知識を基に考える機会や、他者と課題を共有し課題解決のために協働する機会の設定、そしてそのための手立てを検討することが求められる。

(文責 齋藤大地)

引用・参考文献

文部科学省 (2014) 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)」

東京学芸大学附属特別支援学校 (2014) 研究紀要 第 58 号.

【付記】

本研究の一部は「障がいを持つ子どものためのモバイル端末活用事例研究『魔法のプロジェクト』」の 2015 年度協力校として助成を受けた。

「くらし（住まい）」 学習指導案

日 時：平成28年1月29日(金)10:00～10:50

対 象：中学部2年7名(男子4名、女子3名)

場 所：中2教室

指導者：齋藤大地(MT)、橋都由美子(ST1)、木村有里(ST2)

1. 題材名 「自分の部屋をきれいにしよう 一窓ふき」

2. 題材設定の理由

中学部では、生徒が「家庭生活に必要な調理、被服、住まいなどに関する基本的な知識と技能を身につけるとともに、地域で生活するための基本的な知識（健康・安全・性、金銭など）を知り、進んで家庭や地域での生活に参加できるようになる」ことをねらいとし、「くらし」の授業を設定している。「くらし」の授業は、「調理」「被服」「住まい」と「生活知識」の4分野から構成され、先の3分野は週1回2単位時間、1年を3期に分け、学年ごとに年間を通じて学習できるよう設定（「生活知識」は週1回1単位時間）しており、中学部2年の1月は「住まい」分野を扱う。

本授業の対象者は中学部2年生7名である。言語による指示で課題に取り組むことのできる生徒から、具体的な見本の提示や身体援助による支援が有効な生徒まで幅広い実態の生徒が在籍する。加えて、生活技能の習得や知識の獲得の程度、及び家庭における実施状況についても個々に異なっているため、共通の題材を扱うも個に応じた支援が中心であり、集団としての学びの機会を十分に保障できているとは言い難い状況が続いていた。

本学級では今年度の5月より、生徒に「くらし」の授業のデジタル教科書が入ったタブレット端末を配布し、授業の予習を家庭で行うという取り組みを続けてきた。この取り組みの主たるねらいは、学校の授業における集団としての学びの時間の保障であったが、最初に現れてきた効果は、生徒一人ひとりの主体性の向上であった。さらに、家庭での様子をタブレット端末に録画してきてもらい、それを生徒間で共有する時間を授業内に設けたことにより、生徒達は様々な観点から自分と他者との“違い”に注目するようになった。こうした“違い”への気づきは、自己と他者への理解を深めるきっかけとなり、集団における新たな学びの可能性を生み出した。

そこで、授業の前半には“家庭での取り組みを生徒間で共有する活動”を、授業の後半には“課題解決型の活動”を設定した。それによって、各生徒が習得した技能や知識を活用し一人では充分に対応できないような課題に集団として向き合う中で、生徒の間に学び合いや支え合いが生まれ、それまで以上に自分を理解し、またお互いを理解することに繋がるのではないかと考えた。

3. 目標

○「住まい」に関する基本的な知識と技能を身につけ、自らの生活に活かすことができる。

4. 指導計画

回数	実施日	学習内容（前半／後半）
1	1/14(木) 2h	自分の部屋の紹介／居室の掃除
2	1/19(火) 2h	自分に合った整理整頓のやり方／居室の掃除
3	1/26(火) 2h	自分に合った床掃除のやり方／居室の掃除
4	1/29(金) 1h *本時	自分に合った窓ふきのやり方 *後半の居室の掃除は省略
5	2/23(火) 2h	自分の部屋の掃除の紹介／まとめ

5. 本時の学習

1) 本時の目標

○自分に合った方法を考え、窓ふきをすることができる。

2) 個人目標

【個人目標☆・手だて○(個別教育計画に関連した目標★・手だて●)】

生徒	実態	個人目標	指導の手だて	関連する個別教育計画の目標
A 男子	・雑巾と洗剤を使った窓ふきの経験がある。年末に家庭で窓ふきに取り組んだ際、やりやすい方法を自ら考えた。	☆複数の方法の良い点、悪い点を比較した上で自分に合った方法を考え窓ふきをする。	○各方法の良い点・悪い点をワークシートに記入して整理する。	
B 男子	・雑巾を使った窓ふきの経験がある。友達がワイパーを用いて掃除をしている動画に興味を示している。	☆複数の方法を試した上で自分がやりたい方法を選択し、窓ふきをする。	○選択する際には雑巾、ワイパーなどの具体物を提示する。	
C 男子	・雑巾と洗剤を使った窓ふきの経験がある。他者の方法を見て、自分の良くなかった点を見直すことができる。	☆複数の方法の良い点、悪い点を比較した上で自分に合った方法を考え窓ふきをする。	○各方法の良い点・悪い点をワークシートに記入して整理する。	
D 男子	・雑巾を使った窓ふきの経験がある。友達が自分と異なる方法でやっている、「自分もやりたい」と意思表示する。	☆複数の方法を試した上で自分がやりたい方法を選択し、窓ふきをする。	○選択する際には雑巾、ワイパーなどの具体物を提示する。	
E 女子	・雑巾を使った窓ふきの経験がある。ワイパーを使った窓ふきを試してみたい気持ちはあるが、その方法が自分に適しているか判断できないでいる。	☆複数の方法を試した上で自分に合った方法を考え、窓ふきをする。	○自分に合った方法を考える前に、各方法に取り組んでい自分の動画を振り返って見る。	
F 女子	・家庭や学校で取り組んだ雑巾と洗剤を使った窓ふきは手順通りにできるが、それ以外の方法では窓ふきの経験がない。	★複数の方法を試した上で自分に合った方法を考え、窓ふきをする。	●自分に合った方法を考える前に、各方法に取り組んでい自分の動画を振り返って見る。	・身近な家事でできることを増やす。
G 女子	・雑巾と洗剤を使った窓ふきの経験がある。友達の方法に関心はあるが、自分の方法に固執する傾向がある。	★複数の方法の良い点、悪い点を比較した上で自分に合った方法を考え窓ふきをする。	●各方法の良い点・悪い点をワークシートに記入して整理する。	・家庭で任された家事を一人で行う。

3) 準備物

TV、タブレット端末、ワークシート、清掃用具（雑巾、洗剤、ワイパー、窓ふきシート）

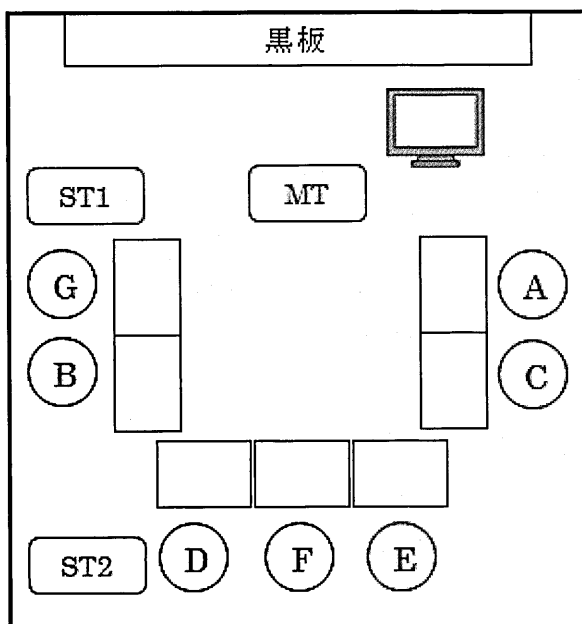
4) 展開

時間	学習活動	指導内容	指導上の留意点
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時までの動画や写真を見る。 ・ 本時の予定を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの学習を振り返る。 ・ 本時の活動内容が分かり見通しを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動画や写真に注目することが難しい生徒がいた場合には、内容に関する質問を投げかける。 ・ MT は本時の予定や活動内容を視覚的に提示（板書など）することで、それらを生徒が随時参照できるようにする。
10:05	<ul style="list-style-type: none"> ・ 窓ふきをする理由について考える。 ・ 各自が考えたことを友達や教員と話し合い、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の経験を基にして、なぜ窓ふきをする必要があるのかが分かる。 ・ 友達と自分の意見を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ MT は窓ふきをする理由について考えやすいように、個々の実態に応じたワークシートを配布する。 ・ 3 グループに分かれて活動する。 ①AC/MT ②BDG/ST1 ③EF/ST2 ・ 教員は活発に話し合いがされるよう、必要に応じて生徒に質問等をする。
10:10	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達が家庭で窓ふきをしている様子を見る。 ・ 友達のやり方の良い点等を発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭で取り組んだ窓ふきの動画を友達と共有する。 ・ 各自の方法の良い点ややり方が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒から意見が出にくい場合には、MT は動画を繰り返し見せたり、静止画同士を比較させたりして気づきを促す。 ・ ST は必要に応じて、生徒がお互いの意見を認め合えるような雰囲気作りを行う。
10:20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 つ以上の方法で窓ふきをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ やってみたい方法を自ら選択する。 ・ 窓ふきの実践を基にそれぞれの方法の良い点等が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 グループに分かれて活動する。 ①→ベランダ側前方 ②→廊下側 ③→ベランダ側後方 ・ 生徒の窓ふきの様子は、教員がタブレット端末で撮影する。 ・ 実践後、A、C、G はワークシートに記入しながら良い点等を考えるよう促す。

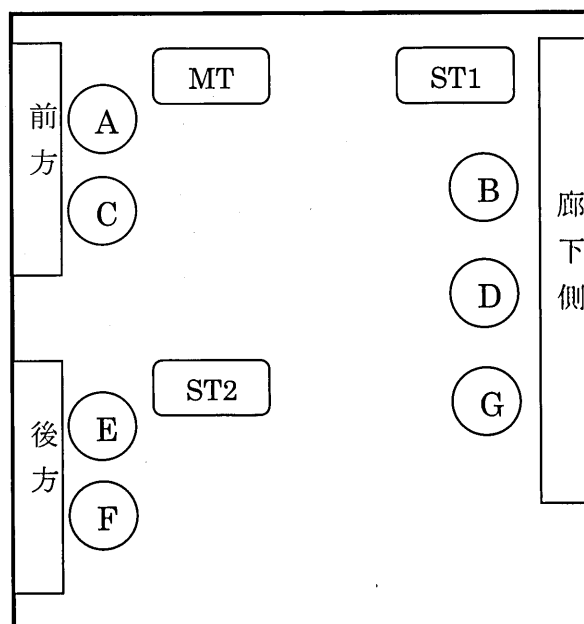
10:45	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に合った窓ふきの方法を決める。 ・自分に合っていると考えた窓ふきの方法を発表する。 ・本時の学習を振り返り、まとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの方法を比較した上で、自分に合った方法を考える。 ・友達と自分の意見を共有する。 ・家族の一員として、自分の部屋の掃除を試みようという気持ちを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・B、D に対しては自分に合った窓ふきの方法を選択する際、実際に使用した具体物等を提示する。 ・迷っている生徒には、タブレット端末で自らが取り組んだ様子を見るよう促す。 ・言語による発表が難しい生徒には、動画を補助的な手段として用いる。 ・MT は各自の部屋の写真を見せながら説明をする。
-------	--	---	---

5) 場面設定

①授業開始時・終了時



②グループ別活動時



6) 評価

(1) 個人目標の評価

生徒	個人目標	評価	コメント
A	☆複数の方法の良い点、悪い点を比較した上で自分に合った方法を考え窓ふきをする。	○	
B	☆複数の方法を試した上で自分がやりたい方法を選択し、窓ふきをする。	○	自分のやりたい方法を明確に表出した。
C	☆複数の方法の良い点、悪い点を比較した上で自分に合った方法を考え窓ふきをする。	○	
D	☆複数の方法を試した上で自分がやりたい方法を選択し、窓ふきをする。	○	
E	☆複数の方法を試した上で自分に合った方法を考え、窓ふきをする。	○	
F	★複数の方法を試した上で自分に合った方法を考え、窓ふきをする。	△	何が自分に合っているか考えるのが難しかった。
G	★複数の方法の良い点、悪い点を比較した上で自分に合った方法を考え窓ふきをする。	△	複数の方法を比較するには至らなかった。

(2) 授業の評価

項目	評価内容	評価	コメント
目標	1. 本時の目標は達成できたか。	△	生徒達自身による本時の目標の捉えがやや曖昧であった。
	2. 本時の目標は適切であったか。	○	
活動	3. 本時の目標にあった学習活動であったか。	○	
手 だ て	4. 教材は適切であったか。	○	
	5. 教材の提示方法は適当であったか。	○	
	6. 教材の使い方は適切であったか。	○	
	7. 教示方法は適切であったか	△	何を基準として「自分に合っている」と判断するのかを明確に教示することができなかった。
	8. 生徒への援助方法は適切であったか	△	生徒が主体的に考える事ができるための声掛け等は工夫が必要である。
	9. 集団の統制は適切であったか。	○	
	10. 生徒への反応の捉え方は適切であったか	○	
TT	11. 教員間の役割分担とその連携は適切であったか。	○	
学習	12. 時間配分は適切であったか	○	
環境	13. 場面の設定は適切であったか	○	

(3) 個別教育計画運用の評価

生徒	個別教育計画からの目標	個人目標 達成度評価	場面の 適切性評価	手立ての 適切性評価	次時への 課題	個別教育計画への 課題
F	・身近な家事でできることを増やす。	△	○	△	自信を持って課題に取り組む。	
G	・家庭で任された家事を一人で行う。	△	○	△	拘りに対する手立てを講じる。	

(4) 指導計画の評価

題材名：「自分の部屋をきれいにしよう」		
総時間数：9時間 授業日：1月29日（金）		
指導形態に関して	指導内容に関して	時間数に関して
個人で課題に向き合う時間を一定時間確保したことにより、その後のグループ活動（話し合い等）が充実した。	第1回の授業において、各自が自分の部屋を紹介したことで、一連の学習に対する動機付けが高まった。	生徒の実態に合わせ、個別に家庭での宿題を出したため、学校における授業の時間数としては過不足なかった。